

Hope News Paper

2月14日（日）

発行：株式会社福幸塾

発行責任者：福田幸志郎

レイアウト編集：磯田真祐


 じゅくちゅうへの
連絡用の LINE
公式アカウント

地方創生は個人から始まる －ただの主婦が手がける、事業としてのまちづくり－

地方創生、ジェンダーギャップ、産業基盤……ニュースを見れば、社会課題の解決に向けたさまざまな取り組みが見つかります。企業や自治体、政府が主導となって、「持続可能な社会」をつくろうとする動きが広がっています。人や地域を思いやる心を感じると、温かい気持ちになります。

一方、個人レベルで考えると大きな問題を解決することは困難に思えてしまいます。「自分一人ががんばったところで……」なんて、無力感や絶望感に囚われてしまうこともあるかもしれません。実際のところ、一人の人にできることには限界があるように見えます。

どうすれば、困難に圧倒されることなく課題解決に向かっていけるでしょう？ そのヒントになるのが、和歌山県上富田町でまちづくりに励む樫木美喜恵さんです。「ただの主婦なんですが……」と語る謙虚さとは裏腹に、その活動は起業家そのもの。特産品のやまももを使った商品開発をはじめ、JR 朝来駅前の交流拠点事業、各地のマルシェへの出店や商談会への参加など、行動範囲は地域全体に広がります。



「最初は話も聞いてもらえませんでしたし、文化祭のノリでやっているように見られることもまだにあります。でも、子どもたちやその次の世代までまちを残していくには、事業として取り組む必要があります」

最初は主婦同士でやまももの PR から始めた取り組みも、気付けば企業や行政を巻き込むまでに発展。最近では総務省へのプレゼンやオーストラリアへの出張、RICOH 株式会社のワークショップの発表など、明らかに主婦ではない活動で日常が埋め尽くされています。

「今だけを見るというんなことをさせてはダメですが、本当に一つ一つの仕事と向き合ってきたんです。地域の集まりに顔を出したり、頼れる人に相談したり、頼まれごとを引き受けたり。与えられた目の前の仕事で最善を尽くしてきたことが今につながっているんだと思っています」

日常的な一人ひとりとの関わりから仕事や産業が生まれ、社会課題の解決につながる。人と関わり続けるからこそ、「持続可能な社会」の根幹なのかもしれません。樫木さんの事業と和歌山県上富田町のこれからの展開に注目です。



桜を継ぐ 株式会社藤大 30 周年物語



1993 年某日

「会社から内職もらってきたし、やるわ」

そう言って、夫が小さなコンテナボックスを持って帰ってきた。まさかそれが従業員 100 人弱を抱える企業に発展するなんて、藤田大子（ハルコ）は想像すらしていなかった。

「そうなんやー、がんばってな。（これでちょっと家計助かるかも）」

ハルコが最初に考えたのは、本当にそれだけだった。当時のハルコは、美容師。子どもも生まれ、育児と家事と仕事に精を出していた。仕事は楽しいし、子どもとの時間も愛おしい。だから夫が内職を持ち帰ってきた時、心に決めていたことがあった。

「私は、絶対、手伝わへんからね」

半導体の部品を扱う夫の職場では、半年ほど残業がカットされることになった。家計には厳しく、夫も夕方以降の時間を持て余していた。だから、稼ぎと時間の問題をクリアしてくれそうな内職はありがたかった。

「……リードカット加工？」

ハルコには半導体の部品を扱う知識や技術はない。専門用語にも馴染みがないから、新たに仕事や勉強の手間が増えるのは避けたかった。自分は育児と美容の仕事、夫は本職と内職を、それぞれ一杯つとめる。そんなバランスの取れた生活を描いていた。そこから、ハルコの人生の歯車は狂い始めた。

株式会社藤大、30 年の軌跡の物語は、ここから始まった。

たとえ想像した未来とは違っても 今日を **生**きていることは **素**晴らしい

「30 年後、自分はどんな人生を歩んでいるだろう？」

若い頃はいろんな未来を想像するものですが、実際に検証することはほとんどありません。大抵は、時代が変わったり人から影響を受けたりして、思いもよめ未来へ進んでいるものです。振り返ったところで意味がない、自分の人生に大した価値なんてない、と思ってしまう人もいます。

しかし、思わぬところで「人生の物語」を思い出すこともあります。「年金を受け取れる年齢になって、年金事務所へ申請手続きに行ったんです。そしたら、年金手帳を受け取った時のことが蘇ってきて……」

嬉しそうに語るのは、北海道オホーツクの地で漁業を営む井田貴子さん。還暦を過ぎてから、思わぬ喜びに出会えたといいます。「オレンジ色の年金手帳を交付された時、これからどんな人生が待っているんだろうと想像しました。どんな仕事に就くのか、どんな人と結婚するのか、子どもは授かるか、健康でいられるか……いろんな未来を想像しながら、毎年届く年金定期便にワクワクしました」

実際の人生を振り返ると、必ずしも順風満帆ではなかったようです。漁師の仕事は過酷だし、地域の付き合いや家族関係に悩んだ日々もあります。「人間をやめてしまおう」と思った時期もあったそうです。

「それでも、死にたいと思ったことはありませんでした。いつか笑い話になると思って耐え忍びました。年金の支払いも含め、真真正正に生きてきて本当によかったと今は心から思います」

年金事務所の職員にそんな経緯を話したところ、多くの職員から賞賛の声をもらったといいます。「がんばって生きるだけで、褒めてもらえることがあるっていいですね」と井田さんは微笑む。年金を受け取る世代になってからのこれからは、次世代のがんばりも応援したいという。

「つらい境遇にいる人にこそ、『時間のやさしさ』を伝えたいですね。辛いことは時間が解決してくれますから、いつか笑い話にできるように生きていきましょう」

価値ある人生や将来の目標を考えることには、悩みや心配がつきものです。しかし実は、今この瞬間を精一杯生きているだけで、「価値ある人生」なのかもしれません。



(目次)

1993 始まりの内職

1995 泥沼の加工ライン

1996 やらさねの責任

 1997 組織化へのカウントダウン
 (母 /1999 働く姿勢
 /2001 経営方針
 /2003 共通認識)

2005 世界基準への挑戦

2006 変化への適応

2007 手探りの挑戦

2008 経営の悪循環

2009 反転攻勢への撤退

2011 成熟への変色

2012 会社と経営者

2013 会社の存在意義

2014 ①改善の日々

2014 ②改善から飛躍へ

2016 未来への布石

2017 理念の体現

2018 新事業への挑戦

 2019 (賛同を得る / チームづくり
 / 店舗探し / 視察と試作
 / 店舗づくり / 味の仕上げ
 / 悲願のオープン)

2020 パンデミックの序章

2021 未来への布石

2022 付加価値の追求

2023 30 周年の節目に (終章)



福祉から始まる ヒーローたちの物語

～ドットラインストーリー 1-3～

『凡事徹底』

浪人を決意してから祐作の生活はシンプルだった。一日10時間以上、ひたすら勉強。友だちとは会わない。原宿にも行かない。家と予備校を往復するだけの生活である。自己評価はもともと高かったから、はっきりした目標さえあれば集中するのは簡単だった。

生活習慣は極端に偏った。睡眠や食事の優先順位は下がり、健康状態は悪化。ひどい時はご飯を食べても吐き出すほど心身に負荷がかかっていた。それでも祐作は気にしなかった。本気を出せば東大も余裕で入れると思っていたし、実際それは誇張や妄言ではなかった。

春に受けた早慶模試は偏差値70後半を記録。日本史にいたっては全国一位を獲得した。これほど集中的に勉強したこと自体が初めてだったから、のびしろは十分感じられた。このままいけば、医療・福祉業界のスターダムに駆け上がるのも時間の問題かもしれない。そう予感した矢先に思わぬ伏兵が現れた。

(あのプレザーは……)

予備校には夏頃から、部活動を引退した現役生が入ってくる。

その中に、祐作は見覚えのある制服を見つけた。

渋谷幕張高校。祐作が高校受験の時に落ちた高校だ。千葉市内の名門私立高校で、制服はオシャレ。国際色豊かな取り組みが特徴的で、しかも偏差値は全国屈指。ついでに、祐作はサッカー部の試合でもボロ負けした過去があった。因縁の相手に祐作の心は揺らいだ。

(あいつらめっちゃ賢いからな。あいつとあいつは、たしかサッカーで試合したよな。私立つばいプレザー、やっぱオシャレだ。あまけに身長も高い……)

祐作もここまで調子よく成績を伸ばしてきたとはいえ、相手は部活動と勉強を両立してきた現役エリートである。これまでの勉強の積み重ねはもちろん、今後は部活動に充てていた時間も勉強するようになる。「あいつら」がさらに成績を伸ばしていくことは容易に想像できた。

負けたくないし、勢いは落としたい。しかしたかだか半年の努力は付け焼き刃にすぎ、エリートに対抗するには心もとない。祐作が敵う道理もなく、次の模試であっさり順位を追い抜かれてしまった。

(……何が「本気」だよ)

自分の能力を過信し、世の中をなめてかかった代償をこんな形で支払うことになるとは。結局、最後にはコツコツやってきた奴が勝つ。才能やセンスがある奴の努力には誰も勝てない。その学びが後の「凡事徹底」につながっていくことを、その時の祐作はまだ知らない。

自分も「そっち側」の人間でいたい。こんな悔しい思いはもうしたくない。そう決意して受験モードを一気に加速させる(はずの)夏……祐作はツチノコ探しの旅に出ることにした。



DOTLINE GROUP

地域には
ヒーローが足りない。

医療 介護 福祉 保育

ドットライン



～奈良県橿原市の門川好美さんミセスアース世界大会へ～

チャレンジ精神豊富な人は世の中にたくさんいますが、「素の自分」を見せられる人は意外といません。自分を取り繕ったり、仮面を被ったりしてしまっている人が大半です。ありのままの自分を表現するのは、年齢を重ねるほど難しくなるように思われます。ましてや未知への挑戦となると、不安や恥じらいまで心に浮かんでくるものです。

門川さんの挑戦は、そんな気持ちを持つ人に希望と勇気を与えてくれるかもしれません。育児をしながら、夫とリフォーム事業を手がけ、ヨガ講師としても独立。女性や子どもへの希望になればと数々のコンテストにも出場してきました。これまでベストボディジャパンやミセスクイーンに出場し、ミセスアースでは世界大会の切符も掴みました。

「年に一度、初めてのことに挑戦するようにしています。『成長痛』に共感できることが、子どもや女性への応援になります」

出産を経験し、年齢を重ねると、体型や健康の維持は難しくなります。そして、時には失敗とも向き合うことになります。しかし、そういう姿を

示すことで「いくつになっても挑戦してもいいんだ」というメッセージが伝わります。「お母さんはやめとくれ、ではなく、苦しみも一緒に味わうことが大切」と門川さんは語ります。

「私の理念は、『健康的に美しく、愛あふれる人生を』です。大人が自分らしく輝き続けることで、我が子だけでなく、次世代の女性にもイキイクと人生を楽しんでもらえたら嬉しいです」

綺麗などだけでなく、失敗や不安といった負の側面も含めて、自分らしさを表現できる人にこそ、真の美しさが表れるのかもしれません。



新しい「学び」の実現に向けて ～堀内菜々美さん～

「私の目指す教育の形は、『子どもたちに希望を持つってもらう』こと」

そう力強く語るのは、大阪教育大学2回生堀内菜々美(ほりうちななみ)さんだ。将来の目標は、幼稚園児や小学生を対象とした初等教育の「学校を作る」こと。その目標のために、経済産業省の「未来の教室」実証事業に採択された企業から委託を受けて公立中学校学習プログラムの作成や、NPO法人の役員を務めながら無料学習塾事業の一つである「寺子屋Teller(てらあ)」を立ち上げ、その運営を学業と両立させている。

「子どもたちが希望をもてる教育」を目指すきっかけは、幼稚園の頃までさかのぼる。堀内さんは、3歳までインターナショナルスクールに通っていた。そこではどんな表現をしても先生や周りから返ってきたのは、「クールだね!」。堀内さんの表現を「尊重」する言葉だった。ところが、家の事情で転園した日本教育の幼稚園では、自分の表現が「評論」される言葉に変わってしまう。

「なんてカエルが・色なのかな? カエルは緑色だよ。描き直そうか」

心の思うままにカエルの絵を描いて言われたこの言葉に、堀内さんはとても息苦しさを感じた。

「ものすごくショックでした。今でも覚えているぐらい。

これ以来、幼稚園が面白くなくなっていく行かなくなりました」

一番大事にしたいのは、「子どもたちが自分のことを知り、自分で物事を決定できるようになることだ」という堀内さん。自分で自然と気がつけるよう導き、環境を整えることが、大人の役割であり教育のあり方だと力強く語る。

幼稚園での体験を筆頭に、父親の仕事柄、生まれ育った兵庫から、神奈川、山口と転校を繰り返してきた、地域や先生によって教育内容の質が変わることも不思議に思った。特に印象深かったのが「探究学習」。地域によって、興味持ったものへの純粋な探究授業をする学校もあれば、受験のための単なる自習時間とする学校もあり、「この違いは一体何なのか?」と学校教育に対して疑問を深めていった。

「本当の『学び』とは、自分で興味を持ち、探り、検証し、結果を出し、その結果から次に進む方向を導きだすもの。だからこそ、没頭もでき『楽しいもの』になると思うんです」

堀内さんと福幸塾との出会いは1年前。じゅくせいの東終太さんとイベントで知り合ったことがきっかけ。あえて「勉強を教えない塾」と称する福幸塾と、新しい学びのカたちづくりに挑戦したいという思いが重なり、福幸塾の「STARTプロジェクト」に加わる。「教育分野における起業家の先輩となるじゅくちょうとの仕事が自分の『学び』となった」と堀内さんは語る。大学で学びつつも、過去に体験して「違う」と思って掲げた教育の理想を実現するための行動は惜しまない。堀内さんのその姿こそ、希望の未来を支える形のひとつだ。



教育大生3人が

世界が注目する学校

GREEN SCHOOL

クラファン ネクストゴールに挑戦!

(目標金額) **30万円**

(目標支援者数) **50名**

へ視察に行って

寺子屋を進化させる





特製チップとこだわり製法で
じっくり本格薫製!

フモッチ

黄身が
とろ〜り半熟

やわらか
くんせい卵





くねおーる



編集後記

『人生を、物語に』

誰にでも、自分だけの人生がある。それは記録に残していくと「物語」になる。そこには必ず「知恵」が刻まれている。だから、あなたの人生には「意味」がある。そんなメッセージを届けたくて、試行錯誤しながら『希望の新聞 HOPE』を作っています。

キリストもソクラテスも、記録を残す弟子がいなければ忘れ去られていたかもしれません。知恵を物語に刻み、人と分かち合ったからこそ、数千年後の今も記憶されています。知恵を伝えるなら、残すべきは財産や記念碑ではなく「物語」です。

この新聞がこれからどんな展開を見るか、自分でもまだわかりません。理解されず、採算が合わず、挫折するかもしれません。それでも、日々の人との関わりから生まれる気付きや学びは、次の世代へと受け継いでいきたいのです。

出会ったみんなの「生きた証」を、記録と記憶に残せるように。一人ひとりの「生きる意味」を、一緒に見つけられるように。物語を紡いでいくことで、「人生を楽しむための知恵」を分かち合っていきます。(福田幸志郎)



勉強を教えない塾
福幸塾
ふくこうじゅく

